



TITLE:

<批評・紹介> 瀋陽狀啓 (奎章閣叢書第一)

AUTHOR(S):

三田村, 泰助

CITATION:

三田村, 泰助. <批評・紹介> 瀋陽狀啓 (奎章閣叢書第一). 東洋史研究 1936, 1(4): 381-382

ISSUE DATE:

1936-04-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138689>

RIGHT:

瀋陽狀啓

奎章閣叢書第一

昭和十年二月二十八日。京城帝大法文學部發行。菊版
六三三頁、附錄四八頁。定價五圓。

鈔本瀋陽狀啓は李王家舊奎章閣所藏の秘籍である。今度京城帝大法文學部から藤田教授田川學士の參訂を経て奎章閣叢書第一冊として刊行された。同書が瀋陽日記と共に清朝入關前の史實を識る上に於て不可缺の史料である事は早く内藤先生が滿蒙叢書所收瀋陽日記の解題中に說かれ、又今西博士は朝鮮學叢書の一に加へて之が刊行を期された事に依つてもその價值ある事が分る。處で此の書は圖版に見られる如く甚だ癖のある草書體で認められ且朝鮮特有の吏讀交りの漢文で書かれてあるし、又文中に出て來る滿洲人の人名等には出鱈目な當字が使用され、例へば肅親王豪格が虎口とあり英俄爾岱が龍骨大等とある如く史料として用ふる際には手に負へぬものである。此度の刊行書には主としてこの不便の排除が考慮されて、吏讀には傍線を附して附録にその意味を説明し、滿洲人の人名對稱表を附せられた。今本書を手にして改

めて參訂者の苦心の程が偲ばれ、誤植とか文の切り方の誤りとかいふ様な微細な事を血眼になつて探す前に、此の種の仕事に敬意を拂はねばならぬ。

此の書が如何なる歴史事實を傳へたものかといふ事は附録に詳しく解題されて今更蛇足を要しないが、簡単に述べると清の崇徳元年に太宗が親しく朝鮮を征し、首都京城郊外の南漢山城に迫つて時の國王仁祖を降し、三田渡に於て清に臣事する事を誓はしめた之を鮮人は丙子虜亂といつて居るがこの役後太宗は朝鮮の世子等を人質として瀋陽につれ還り、以後清が入關する年順治元年迄瀋陽に留置した。世子等の居た館を瀋館といひ此處を媒介として清鮮雙方の意思疎通がなされたので交渉の都度瀋館より本國に宛て、狀啓が齎された。その狀啓文を纏めて一書と成したのが瀋陽狀啓である。之を読むと清鮮當事者間の政治交渉が巨細に亘つて展開されて居てそこには自己の利害を打算する切實な驅引や、抜き差しならぬ政治的現實と彼等の抱く國體觀念との背馳や、その場逃れの切抜策に汲々たる有様が隨處に見られる。他面清廷内部の情勢、清廷對明蒙古關係の推移の觀察は、それが直ちに鮮廷に於る對清關係の見透しを決する材料となる

のでその報告は正確で然も生彩を帯びたものである。一體此の藩館の設定自體は甚だ變態的な外交の表れで、我々はそれ等を通じて鮮廷を支配して居る極めて奇怪な觀念に氣がつく。それは明との宗屬の關係、即彼等の事大交隣の觀念である。陸奥宗光の蹇々錄を見ると日本政府は韓國を一個の近代的な獨立國家と見做さうとしたにも拘はらず清國との間に介在する「曖昧な宗屬の關係」には少からず惱まされた事を記して居るが、之と同じ様な現象は清朝が興起した際にも見られ、清が朝鮮との交渉に於て事毎に行詰り、惱まされた難關はこの宗屬の問題であつた。清の第二次征鮮、即丙子の役は恐らく武力を以つてこの觀念を根底から破壊する爲になされたものと思へる。宗屬の觀念は一言でいへば李氏朝鮮を存立せしめる内的支柱で、現實に明から冊封を受ける事は觀念的には夷を去つて中華に事へるといふ李氏開國の名分を裏づける事になり、これ彼等が東方禮儀の國を自稱する所以である。當時鮮廷に將來された朱子學はこの觀念を體系づけ高揚する事に役立つた。宛も徳川期の儒學がその封建制の維持強化役割を演じたのと同じ事である。故にこの觀念は直ちに國體存立の精神と結びつく。明が滅び

夷狄たる清の冊封を受ける事はもはや李氏朝鮮の存立の支柱を失ふもので、以後朝鮮には唯生き乍ら觀念の亡靈と化し禮論と黨争に依つて自己を磨滅せしめる歴史が存するのみである。こゝに自ら李氏朝鮮を形づくる特質が見られる。かく考へてこの状態を見ると遊離せる思想が人を苛いなむ奇怪な姿が全卷を通じて窺はれ、更にかゝる思想の内容に到つては到底我々には了解し能はぬ處である。その意味に於て瀋陽状態は單なる史料としてのみでなく讀物としても興味深い書である。

(三田村 泰助)